

## 昔感 中原に覇業進める住友グループ⑬ 今雑 トーメン、磯輪英之氏が社会人第一歩

トーメン(続き)Ⅱトーメンの紙パルプ専業会社、トーメンテクノソリユージョンは、資本金2億65百万円(トーメン全額出資)、最盛期は段原紙12万トン、紙器用板紙2万トン、古紙17万トン、その他5万トン、合計36万トンを取扱い、平成15年3月期には96億円を売り上げた。

しかし商社系紙パルプ販社としては規模、存在感共に小さく、先行き展望もないため、平成15年8月28日にトーメングループの紙パルプ事業(大豊製紙、山陽板紙、インドネシアのオリエンタル・アサヒ・リーマンカートンボックスの持株及び営業権含む)日本紙パルプ商事に譲渡し、トーメンは紙パルプ事業から撤退した。

### トーメン子会社(日本紙パへ売却)

▼大豊製紙Ⅱ岐阜県加茂郡川辺町、資本金99百万円(トーメン持株率46%、筆頭株主)、従業員72名、年商38億円、段原紙月産1万トン、年商38億円

▼山陽板紙Ⅱ岡山市西大寺、資本金1億35百万円(トーメンの持株率13%、2位株主)、従業員110名、石膏ボード原紙、紙器用板紙、月産8000トン、年商36億円

▼オリエンタル・アサヒ・リーマンカートンボックスⅡインドネシア・ジャカルタ、資本金500万米ドル(持株50%)、従業員190名、段ボールシート月産400万平米、ケイス300万平米、年商1700万米ドル

一方、同社機械部の岡島正紀氏が、米国ハンチンドン社が開発したパーチション・スロット・アッセンブラ(仕切製作機)に着目、輸入販売に乗り出し、1号機をレンゴー東京工場へ納入、注目を集めた。段ボール箱の付属品である「仕切板」は、人手作業、人海戦術に依存しており、段ボール製造現場のネックであるため、これを機械生産化するハンチンドン社マシンは「仕切板」に生産革命を巻き起こ

すと期待されたが、実際には高価格にして大掛かりな機械図体、その割に低速、非能率的など難点が多く、普及には至らなかった。

トーメンはこれとは別に英国ヘンリー・サイモン社と丹羽鉄工所間のプリンタスロット技術提携を仲介するなど重要な役割を果たした。英国ヘンリー・サイモン社は航空機、造船原子力などを手掛ける重工業の世界的大手メーカーで、プリンタスロットの世界トップであるフーパーとコルゲータ専業のスイフトとの合併会社「フーパー・スイフト」と提携、サイモン・フーパーのブランドでプリンタ市場に進出した。一方、丹羽鉄工所は段ボール機械専業トップであり乍ら技術開発に立ち遅れ、プリスロの高性能化、更にフレキシソへの移行が遅れたためトーメン扱いでサイモンと提携し「フーパー技術」を導入した。「丹羽サイモン」1号機は正田紙器工業(群馬県)へ納入、しかし丹羽鉄工所は昭和47年9月に経営破綻した。フーパーのプリスロ技術は丹羽鉄工所の下請先であった梅谷製作所に受け継がれ、今日ではフレキシソプリスロ、フレキシソグレア市場で重要なシェアを形成している。

因みにフーパーは元々プリスロ専業の独立メーカーであったが、その優れた技術と世界的知名度故に数奇な運命を辿った。コルゲータ専業のスイフトと合併して「フーパー・スイフト」、これがサイモンと提携して「サイモン・フーパー」、次に米国コッパーズ傘下に移り、更にコパーズと技術提携を結ぶ日本のISOWAと共同出資で日本に「イソワ・フーパー・スイフト」を設立、今はこの名で日本市場に定着している。

このトーメン機械部に異色の人材が登場する。磯輪鉄工所(現ISOWA)磯輪英一社長の長子、磯輪英之氏(現ISOWA社長)が一橋大学在学中に、磯輪鉄工所との技術提携先である米国コッパーズに昭和53年から1年間「留学」して修行を積み、大学卒業後トーメンに入社、ここで社会人への第一歩を踏み出し、5年間、商社マンとしてビジネス修行を積んでいる。

続く

(政)